

弘末：それでは、最後に澤山さんにコメントをお願いしたいと思います。澤山さんは関西大学国際学部のご所属でいらっしゃいます。ご専門は国際協力で、ブータン等で活動されたご経験をお持ちです。それでは、どうぞよろしくお願いたします。

澤山：こんにちは。関西大学の澤山と申します。私は国際協力が専門ですので、国際防災・減災協力の観点からコメントをさせていただきます。

マクロ的には巨大災害を経験した我が国の国際防災・減災協力は、ボーダレス化の進むグローバル時代の安全保障に寄与することが期待されます。

国際機関、二国間、そしてNPO/NGOによるあらゆるレベルでの協力を通じて発災直後の緊急援助から復旧・復興へのシームレスな国づくり・地域づくり・人づくりの手法を一層発展させていく余地があります。

次にミクロ的な意義としては、ソーシャルキャピタルの蓄積に資する災害文化の醸成をあげることができます。防災・減災に関する知識や技術の移転には、当該地域の風土や言語、環境等に配慮した持続可能なものでなければなりません。住民のオーナーシップの尊重も大切です。

このようなマクロとミクロの視点を踏まえ、我々地球市民の務めは、被災の経験と防災・減災のノウハウを共有し、そして反芻することで、実際に機能する体制を作ることではないかと思えます。そのことは、今の時代に生きる人々の命を救うことにとどまらず、子孫の命を救うことでもあります。まさに時空を超えた命、暮らし、財産を守ることになります。

先程のインドネシアとタイの事例もそうですが、東日本大震災の被災事例においても、各国からいろいろな支援が寄せられました。情けは人のためならずということも心に刻んでおきたい所です。遠くで起こった災害に対しても対岸の火事とするのではなく、他山の石として身近に感じる事が大切ではないかと思えます。国際機関やODAの枠組みに加え、多くの人々が復旧に携わる意義は大きいと思えます。ありがとうございます。以上です。

弘末：澤山さん、ありがとうございました。